反天皇制運動
Alert
42号
［通巻 424 号］
2019 年
12 月 3 日発行
第Ⅹ期・反天皇制運動連絡会

今月の Alert ◉1年間の「代替わり」反対闘争の成果を反天皇制運動の糧に――＊2
反天ジャーナル ◉――はじき豆、なかもりけいこ、ねこまた＊3
状況批評 ◉ 平和の少女像のそばにいて――表現の不自由展、その後の中止の顛末●――永田浩三＊4
書評 ◉『画家たちの戦争責任――藤田嗣治の「アッツ島玉砕」をとおして考える』――鰐沢桃子＊6
太田昌国のみたび夢は夜ひらく〈114〉
◉ フランシスコ教皇来日に思う――太田昌国＊7
マスコミじかけの天皇制〈41〉◉〈原爆神話〉と〈聖断神話〉
――〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その6――天野恵一＊8
野次馬日誌＊9 集会の真相＊10 学習会報告＊11 反天日誌＊12 集会情報＊12

父が 10 月に亡くなった。

母がとある金融機関から紹介を受けて、「すべての遺産相続手続きをうちが代行しますよ、と言われたのでそこに頼んでよいか」と聞いてきたので、料金を聞いてびっくり。110 万円＋ α（遺産の規模による）という。その金融機関から詳細に説明を受けて丁重にお断りした。

父は遺言らしいものをＰＣに残していたが、遺産に関する記述はなく、まずは法定相続人の確定が必要だ。その際に父の出生から死亡までの戸籍謄本が必要となってくる。1933 年に香川県高松市で生まれて結婚してから 1975 年に現在の横浜市の実家に転籍しているので高松市役所に出生から転籍までの戸籍謄本を請求した。アバウトに３～４千円の郵便小為替を同封してほしいと言われ首を傾げた。到着した封筒には除籍謄本２通と改製原戸籍謄本１通が入っていて合点がいった。婚姻や転籍だけでなく、戸籍法の改正によって戸籍の様式が変更されて新しい戸籍に書き替えられると引き継がれない身分関係が生じてくるため、移行前の戸籍を「改製原戸籍」として保存するシステムとなっている。つまり親族関係を遡るにはこの「改製原戸籍」と「除籍簿」が必須なのだ。これらの帳簿によって他に配偶者や子供などの法定相続人が存在しないかを厳密に特定する作業を通じて「血に応じた」分配の論理が貫徹される。その原型は天皇制であり、皇統譜と臣民籍（＝戸籍）とはパラレルなのだ。

だとすれば、基本的に財産を相続するなんてシステムを丸ごと止めてしまうほかないのではないかとつい夢想してしまう。相続しなければ遡る必要もないし、それを巡って争いもなくなる。戸籍も必要なくなるのだ。生きているうちに使いきれない資産などは供託してみんなのために使うシステムができないものだろうか。（宮）

250 円
●定期購読をお願いします（送料共年間４０００円）
●郵便振替　00140-4-131988　落合ボックス
東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A　淡路町事務所気付　落合ボックス
TEL/FAX 03-3254-5460　URL http://www.ten-no.net/mail: hanten@ten-no.net
●以前の情報はこちら▶ http://hanten-2.blogspot.jp/

今月の Alert

1年間の「代替わり」反対闘争の成果を反天皇制運動の糧に

私たちはいま、首都圏の仲間たちとともに呼びかけ、多くの人々とともに「代替わり」反対闘争を連続的に闘い抜いた「おわてんねっと（終わりにしよう天皇制！『代替わり』反対ネットワーク）」の、街頭行動を伴う行動としてはおそらく最後となる、12・7「終わりにしよう天皇制！ 2019大集会&デモ」の準備に向かっている。年明けにも総括のための集会を持ち、おわてんねっととしては正式に解散する予定だが、正式結成以来一年、反元号署名運動などの「前史」も含めれば足かけ三年にもわたる、一連の反天皇制の行動に、ひとつの区切りを付けることになる。

一連の行動を通じて、私たちは少なくない未知の友人たちと出会い、あるいは新たに出会い直す経験を重ねていくことができた。そして、共同の作業や討論、行動の場を共有しながら、特権身分制度と差別の象徴、国家主義的民衆統合の軸である天皇制に、はっきりと否の声を上げ続けることができた。私たちの行動それ自体は、六〇〇に届く数のものとはならなかったとはいえ、前回「Xデー」以降も反天皇制運動に関わってきた者としては後退戦を強いられてきた反天皇運動状況において、おわてんねっとがひとつの結集軸となって、解放感のある、また手応えも実感できる運動が作りだされていたと考える。そして私たち反天連も、その運動の一翼を担ったことに、いささかの自負さえ覚えている。

とりわけこの一年間は、4月30日の明仁天皇退位――5月1日の徳仁天皇即位への対抗行動をピークとする「反天week」、10・22「東京戒厳令を打ち破れ！ 天皇即位式反対デモ」と11・14のナイトイベント「大嘗祭反対！@トーキョーステーション」を、それぞれ大きな柱として設定しながら、ほぼ毎月にわたって、さまざまな反天皇制の行動や討論会などを連続的に打ち抜いてきた。そしてその全てにわたって、私たちの予想を超える数の人びとが結集し、ともに「天皇制はいらない」という明確な声を上げていくことができたのである。個人的に印象深かったのは、四月三〇日に新宿アルタ前で展開された「退位で終わろう天皇制！ 新宿大アピール」だ。それは警察や右翼の介入をはねのけて、二時間にわたって一等地を占拠し、大きな横断幕を広げてのアピール行動だった。そして目の前にあるアルタ・ビジョンに、明仁天皇の退位式の模様が映し出されるや、式典の間中、抗議のコールが上がり続けた。天気も悪く、少数の情宣活動でもこの日にやろうと考えていた私たちの想定を超えて、デモがあるわけでもないのに、一五〇名もの人びとがアルタ前を埋め尽くしたのだ。同様の状況は、皇居の「大嘗宮」まで九〇〇メートルという絶好のポイントで取り組まれた一一月一四日のナイトイベントにおいても現出した。

解放感をもたらすことのできたゆえんは、ひとえに、いま目前で現出している天皇制総翼賛状況に対して、なんらの「忖度」や「戦術的判断」などをすることなく、きわめてストレートに「終わりにしよう天皇制」という声を上げていく場所を確保し、反天皇制運動の存在を一定程度可視化することができたからだといえよう。前天皇に感謝を捧げ、新天皇を奉祝するムードが文字通りに列島を覆い、いわゆる「リベラル」派の言説もそれに加担していくなかで、まずは鮮明な旗を立てることが求められていたのだと思う。

これまでの行動としては最大規模の五五〇名近くが参加した「即位式」反対デモでは、機動隊による執拗な介入・挑発が繰り返され、それに抗議した三名の参加者が逮捕されるという弾圧もあった。その日のうちに立ち上げられた救援会と、弁護団の手厚い活動によって、一一月一日までに全員が奪還されたが、ここで発揮された大衆的な反弾圧の行動も、これら一連の行動を貫いた「精神」と別個のものではなかった。

そうしたなか、「第31回多田謡子反権力人権賞」が、関西救援連絡センターや入管行政と闘ってきたエリザベス・アルオリオ・オブエザさんとともに、反天連が受賞するとの知らせがもたらされた。一九八四年結成以来の反天皇制運動の取り組みが評価されたものだが、この一年の反天皇制の闘い全体への賞であることは疑いない。

もちろん、来年も反天皇制運動の課題は目白押しである。一連の行動を通して得たものを大切にしながら、来年の行動に取り組んでいこう。「『自由・民主・平等・平和』をもとめる道に、天皇の居場所はない」（10・22ビラ）のだ。

（北野誉）

反天ジャーナル

天皇代替わり騒動後半戦

天皇代替わりの前半戦が「改元」騒動だとすれば、後半戦となる即位礼・大嘗祭が終了し、代替わりも幕を閉じつつある。その中での「10・22即位式反対デモ」弾圧には本当に驚いた。

正直いって、弾圧が起きれば代替わりに「水を差す」ことになるので警察は自重するだろう、と私は勝手に考えていた。だが実際に起きたのは参加者三名に対する典型的なでっちあげ公妨罪である。今回の弾圧を誰がどう決断したのかはわからない。けれどもそこには、弾圧が起きてもメディアはまともに報道しないだろう、という計算があったのだろう（実際ほぼその通りとなった）。私が国家権力や社会を見る目は全然甘かった（そして救援会のみなさん、本当にお疲れ様でした）。

他方、即位礼・大嘗祭は「改元」ほど人々の心をざわつかせることはなかったように思われる。それは「改元」が私たちの日常生活に少なからぬ不便をもたらすのに対し、一連の儀式は多くの人々から遠いところで起こったからだろう。とはいえ「改元」の中で少なからぬ人々が天皇や元号のあり方について抱いた疑問や困惑の行方は、私たちの今後の取り組みにかかっているはずだ。しつこく気長にがんばろう。

（はじき豆）

「踏み絵」となったマイナンバーカード

二〇二三年三月末までにほぼ全ての住民にマイナンバーカードを持たせたい政府は、カードの普及に躍起になっている。カードの交付が始まってすでに四年目。メリットもなく、個人情報の漏えいへの危惧からか、交付枚数は一一月一日現在、約一八二三万枚で取得率は一四・三%でしかない。

何とか普及率をあげようと自治体ポイントへの活用や消費増税緩和策としてのマイナポイント（キャッシュレス還元）活用、さらに健康保険証への利用を進めるなど必死だ。そのために公務員への取得強要や市町村毎に交付枚数のノルマを課すなどなりふり構わずだ。各省庁が全職員に取得の有無、取得しない理由を家族まで含めて尋ねる調査を行っていることが判明。しかも個人名の記入欄まである。「これはもう思想調査で政府への忠誠心を試す踏み絵だ」と批判が広がっている。取得の強要より利便性を高めるほうが先決だとの指摘もあるが、個人がもつすべての情報を国家が一元的に管理、掌握するのがマイナンバー制度だ。

監視は管理のために個人データを網羅し、生活を囲い込み、制限し、この中でしか通用しない社会を作ると言われている。カード取得はそれに拍車をかけそうだ。

（なかもりけいこ）

「成長促進地域」って?!

過疎地支援を検討する総務省の有識者懇談会が示した用語例。過疎がもつ否定的なイメージを払拭するのだと。武器ではなく「防衛装備品」だから死の商人じゃない、というのと同類ね。そして大手をふって幕張メッセで国内初の武器見本市「DSEI JAPAN」を開催し、海外一〇〇社、日本五〇社が参加した。

一一月末には「特定地域づくり事業推進法」が与野党の賛成多数で成立。こちらは若者を過疎地に連れこむ算段の法律だ。住みつづけるための手立てをとりあげておいてよく言うよ。赤字つづきの鉄道を、その代替のバス路線も住民がさらに減って採算がとれないからと廃止。同様に、採算がとれない公立病院は統合・再編しろとリストを公表した。その一方で、住みなれた場所でさいごの時を、なんて美しげなことを言ってさ。どちらも厚労省よ。でも、北海道では在宅・介護分野で二〇二五年にはあと七五〇〇人の介護職が必要と試算されたが、実現はむずかしいという。

即位行事が喧伝された一〇月、道東の矢臼別演習場では米海兵隊の実弾演習が行われ、今回は白リン弾も発射した。沖縄の負担軽減なんて嘘を掲げて年々規模拡大。過疎地がふえれば演習場がふやせるってか?!

（ねこまた）

状況批評
思想・状況・批評

平和の少女像のそばにいて
表現の不自由展、その後の中止の顛末

永田浩三（武蔵大学教員）

後世の歴史家たちは、二〇一九年という年をどんな年と語るのだろうか。

ベルリンの壁の崩壊から三〇年。香港でいまも続く若者を中心とした抵抗運動天皇の代替わり、安倍政治による行政の私物化の極致としての「桜を見る会」。この原稿が目に触れるころには、政権は倒れているのだろうか。

わたしや仲間たちにとって、二〇一九年の夏から秋は、からだじゅうが痛くなる日々だった。あいちトリエンナーレ「表現の不自由展・その後」の中止事件である。だが、苦しみのなかで、一条の希望の光が差したともいえる。反天連の方々を含め、たくさんの方々の応援と連帯のおかげで、六日間という短い期間であり、多くの制限が付加されたが、それでも再開を実現できたことは、すこしうれしい。わたしは企画展の実行委員会五人（アライ＝ヒロユキ・岩崎貞明・岡本有佳・小倉利丸・永田浩三）の一人として、準備の段階から本番、再開に至るまで関わった。折々に掲載された新聞記事やテレビのニュースを目にした方たちは、喧騒にまみれた光景を想像されるかもしれない。だがそうではなかった。会場は静謐で、緊張の中にも笑みがこぼれるような空間だった。若いひとも年配のひとも、男女にかかわりなく、お客さんの多くが「平和の少女像」に向き合い、写真を撮ったり、横に置かれた椅子に座ってみたり。少女像に触ってみるひとや、丁寧に語りかけるひともいた。

少女像をじっと見つめる女の子に聞いてみた。「何で少女の左の肩に黄色い小鳥が止まっているのだと思う?」女の子は、「ひとりぼっちで、かわいそうだから、小鳥が『友だちになろう』ってやってきてくれたと思う」と答えた。韓国では、小鳥はあの世とこの世をつなぐ架け橋のような存在である。少女はもはやこの世にはいない。霊界にいる彼女をこの世につなぐために、黄色い小鳥は肩にとまり、この世との回路を結んでくれたのだ。

今回の企画展「表現の不自由展・その後」はタイトルに、わざわざ「その後」と記してある。これは二〇一五年に、武蔵大学前のギャラリー古藤で開催した「表現の不自由展」の「その後」にあたるという意味だ。

「表現の不自由展」のはじまりは、さらにその三年前の一二年の夏にさかのぼる。この年、東京・新宿のニコンサロンで、元日本軍「慰安婦」だった女性たちの撮影をし続けた韓国人写真家の安世鴻さんの写真展が、「在特会」などによる電話やメールを使った攻撃で中止に追いこまれた。安さんは開催を求めて東京地裁に仮処分の申し立てを行い、安さんの側の主張が認められて開催は実現した。しかし、ニコンサロンの会場は、まるでテロ対策を行う空港のように大掛かりなセンサーが設置され、持ち物チェックがあり、物販は禁止され、私語もメモも禁止されるという物々しさだった。とても写真を落ち着いて鑑賞する場所とは言えなかった。わたしは安さんのことが他人事とは思えなかった。

二〇〇一年、わたしは当時、ＮＨＫのプロデューサーだった。二一世紀が始まるにあたって、戦争の世紀と呼ばれた二〇世紀を「人道に対する罪」の観点から四回のシリーズで問い直そうとした。そのなかの一本が、日本軍による「慰安婦」問題だった。東京・九段会館に「民間法廷」が設けられ、アジア太平洋地域の被害者が集結し、日本軍や日本政府、昭和天皇の責任を問うた。番組は被害者の声をしっかり紹介し、国際法の専門家が裁きを与える場面も伝えるはずだった。しかし、放送前から、右翼が騒ぎ出し、ＮＨＫ放送センターに乱入し、わたしを殺すなどと言って騒いだ。異変が起きたのは放送前日である。ＮＨＫの幹部が、内閣官房副長官だった安倍晋三氏らと面会し、局舎に戻ったあと、編集長であるわたしに劇的な改変指示を出した。番組は四四分から四〇分に短くなり、被害者の証言は大きく削られてしまった。安倍氏は、ＮＨＫの放送総局長に対して、「公平公正にやってくれ」と言っただけでなく、「お前、勘ぐれ」とも言ったとされる。日本国憲法第21条2項には、「検閲は、これをしてはならない」と書かれている。安倍氏は、当時官房副長官という政府高官であり、番組の内容という思想信条に関わることについて放送前に修正を求めたとしたら、事前の検閲として憲法違反の行為を犯したことになり、憲政史上最長となる内閣総理大臣にそもそもなっていなかっただろう。

二〇一二年、同じ思いを抱いたひとがいた。かつて『前夜』という意欲的な総合雑誌の編集長を務めた岡本有佳さんである。たとえ攻撃があろうとも、志を同じくするひとたちが力を合わせれば、きっとはね返せるはずだ。わたしが勤務する武蔵大学の斜め前の「ギャラリー古藤」のオーナーの田島和夫さんと大崎文子

さんが賛同してくださり、練馬の仲間たちが結集することで写真展が実現した。

安さんの写真展は計三回開催した。ニコンサロンを相手どった裁判が始まり、それも支援するなかで、展示の場を奪われる事件は、安さんの場合だけではなく、頻発していることが分かってきた。だったら、そうした撤去された作品を集めて日本社会の今の言論・表現の不自由について考えてみたい。それが二〇一五年の〝元祖〟「表現の不自由展」であり、その目玉が「平和の少女像」だった。見に来たひとの中に津田大介さんもいた。去年の六月、津田さんから、「あの展示をやりたい」というオファーを受けたことが、今回の展示につながった。

展示実現のために動き出したのは今年四月。激しい攻撃があることは当然予想された。「平和の少女像」が真っ先にその対象になることもわかっていた。そこで岡本さんを中心に、警備の専門性と豊富な経験を持つ方とともに、警備や電話受けの態勢、警察との関係など、細かに伝えた。電話攻撃に耐えられなくなったら、上司がフォローする組織を作ってほしいと要望した。

八月一日の初日。作品を見る観客の姿は感動的で、列は途切れなかった。多くのお客さんの「平和の少女像」の前での反応は冒頭の通りである。

そんななか、ひとつのことが進行していた。津田さんに促されて事務局の部屋へ行った。緊張が漂っていた。職員が電話にかかりっきりになり、他の仕事ができない状態だった。津田さんは憔悴しきっていた。

事前に要望したことは十分行われておらず、研修やバックアップ体制は整っていなかった。わたしたち実行委員は、「替わりにやりましょう」と申し出た。わたしはこれまでの経験から、苦情電話に慣れていた。しかし、事務局のひとたちは「県がやることになっています」の一点張りだった。

八月二日午後、津田芸術監督が記者会見をし、たくさんの苦情や攻撃が来ていることを明かした。今後については知事と実行委員会とが話し合って決めると話した。

わたしは、二日の夜に東京で放送に出演する予定があったため、午後二時過ぎに会場を出て夜の放送に出演した。そして、津田さんと実行委員会が集まる深夜の会議にネット電話で参加した。会議は午後一一時ごろから翌午前二時すぎまで続いた。

そこでのやりとりは生涯忘れないだろう。

津田さんが切り出した。「明日を限りに『表現の不自由展』を中止することに決まりました。知事と私（津田）で判断しました」という通告だった。

「そんなことはありえない」。その日の記者会見では、今後のことは、知事と津田さん、実行委員会の三者で話し合って決めるとはっきり発言していたし、われわれとあいちトリエンナーレ事務局との間で締結した契約書にもそう書いてあった。一方的な通告は、契約違反であり、断じて承服できない。激しいやりとりとなった。

私は「まだ出来ることがいっぱいあるのではないか」と説得した。津田さんを羽交い絞めにするほどの気持ちを言葉に込めた。なぜ、そんなに力がこもっていたのか。それは先ほど書いたわたし自身の苦く恥ずかしい経験と関係がある。あのとき、政治家の介入を受け、番組を劇的に変えるという指示がＮＨＫの幹部から出された。抵抗はしたものの、十分ではなく、無残な形で放送は出た。わたしの人生は、このときから一変した。

わたしは、津田さんにすべての体重をかけて言った。命がけのつもりだった。「いま攻撃を受けていることはつらい。しかし、やめたからといって、楽になるものではない。これはあまりに大きな出来事だから、津田さんのその後の人生に影を落としかねない。私と同じような失敗を繰り返してほしくない。人生は二度と戻ってこないのだから」。

津田さんは神妙に聞いていた。中止の判断が覆ることはなかった。

今回の中止事件では、われわれ実行委員会が、名古屋地裁に、展示再開の仮処分の申し立てを行うなかで、「電凸」などの対策を積極的に提案し続けたこと。アーティストたち一六人が封印・ボイコットなどの連帯の抗議行動を行っただけでなく、展示に否定的なひとたちとも対話を試み、苦情電話を受けることも行い、さらに多くの市民や団体が声をあげたことなどすべてが成果をあげ、一〇月八日から実質六日間の再開を実現することができた。だが、その再開は限定的であった。その不十分さについてもきちんと検証されるべきだ。

芸術というものは一本のマッチのようなもの。灯りがあることで、周囲の闇の深さ、深刻な闇の実態が浮かび上がる。言論・表現の自由は、我々が生きていく上で、もっとも基本的な権利だ。言論や表現が不自由になることは、生きていくことが不自由になるということに他ならない。そんな息苦しい世の中がよいはずはない。その先に待っているのは、あのモノが言えない時代の再来、つまり戦争の時代への逆戻りだ。いまこそ市民とメディア、そしてさまざまな表現者たちとの懐の深い連帯が求められている。

書評

画家たちの戦争責任
――藤田嗣治の「アッツ島玉砕」をとおして考える

鰐沢桃子

一九二五年、治安維持法公布の年に生まれた著者は、教育によって、軍国少女に仕立て上げられていく。生真面目で一生懸命な性格は随所で紹介されるエピソードでうかがえる。

真珠湾攻撃が始まって間もない一九四一年、高等女学校四年生の小夜さんは「鬼畜英米」のポスターの制作を教師より頼まれる。

画用紙の上半分にルーズベルトとチャーチルの笑顔を描き、体を肉挽き器に入れ、ハンドルを回すと血肉がしたたり落ちる画を描いたという。受け取りを拒否した教師に、戦争の非人道性をここまで露わにした生徒の絵を見て己の役割に気づいたのかと著者は書く。ワットマン紙は赤い絵具の吸い取りもよく心地よかった。

まっすぐな少女の感性は、戦意高揚を仕掛けたものたちの思惑どおりにそれを吸い上げていった。

この本は、戦争に芸術が果たした役割を、特に藤田嗣治に焦点をあて検証する。その時代を同時に生き、唆されたものとしての著者の告発がそれを裏付ける資料とともに記され、都合のいい解釈など入る余地を許さない。まさに生き証人とはこのことだろう。

著者は一貫して自分を軍国少女に仕立てていったものたちの正体を知りたいと、戦後の人生をそのことに費やしている。「プロパガンダに取り込まれた恨みを晴らすとともに、戦争推進の役割を果たした私の責任も明らかにする」とこの本の「はじめに」で、十代の読者にむけて語る。

著者は藤田の戦争責任を糾弾しているのではない。己の犯した罪の責任に向き合う姿勢を求めている。

それにしても、実に沢山の美術展に足を運んでいるものだと感心する。戦後アメリカに接収された戦争画を追っかけるように、作品の前に立っている。そして、どのような展示の仕方か展覧会の意図を注意深くチェックする。「戦争画については、軽はずみな汚点のようにみなされるむきがある」とは著者の感想だ。

芸術は人々の感性に訴えかけるものである。そして作品は時代とともにその評価も変わっていく。当時、人々を鼓舞し、戦争に駆り立てた絵が、時を経て、真逆の価値を与えられる。朝日新聞「夕日妄語」加藤周一の「藤田嗣治私見」では戦争画が反戦画にすり替わっていく。

十八歳の著者は「アッツ島玉砕」の前で、「仇をうつ」「撃ちてし止まん」と誓った。年老いた夫婦が手をあわせ、その絵の前には賽銭箱が置かれたという。

藤田の「戦争画制作の要点」には積極的な戦意高揚を示唆する記述がある。

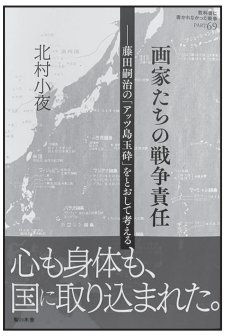
著者はその場にいた当事者である自身の経験と資料を丁寧に提示する。そこに藤田の絵を反戦画と言い繕う隙間はない。

芸術に限らず、その意図や時代背景を考慮しない思考は、真相や真実をゆがめてしまう危険性がある。昨年の「教育勅語に普遍性を持つ部分がある」という文科相のとんでもない発言は記憶に新しいが。

「歴史の文脈で物事が語られなくなったな～」としみじみと知人が嘆く。その、ことの重大さを、思わないではいられない。著者のホームグランドである学校教育における教育勅語や修身教科書の話、子供たちを洗脳し、人々を煽動していった歌に関してもスペースをさいて問題提起がされている。それによって読者はなお一層、戦争画が果たした役割をしることが出来る。

著者は満州で敗戦を迎える。その苦労を語らない。「引揚げは侵略者として赴いたから起こったことであるから、語るなら、さきの侵略の実態をきちんと語ってからでなければならないと思っているからである」。著者の徹底した加害者意識に私は驚愕した。何事にも一生懸命で妥協を許さないのは、少女の頃から一貫している。そのこだわりがなければ、私たちはこの本を手にすることが出来なかったかもと思ったりもする。刊行されてとても嬉しい。

藤田は戦犯画家の批判を受け日本を逃れた。しかし、横山大観は戦後も美術界に君臨した。責任の所在を突き止め、責任をとらせ謝罪させる。すべてそこから始めるしかないと思う。



『画家たちの戦争責任』
北村小夜：著
梨の木舎：刊
定価：1,700 円＋税

みたび 太田昌国の夢は夜ひらく114

フランシスコ教皇来日に思う

幼いころ、地方都市にあっても、お寺・神社・教会は程遠からぬ場所にあった。通夜や葬儀の時に意味も分からず出入りさせられたのはお寺で、それ以外には立ち入る機会も稀だったが、子ども心にもそれらは日常生活を離れた不思議な異空間で、興味を惹かれた。でも、そこからは過大な影響力を受けずに成長し、気づいたときには確信的な無神論者になっており、現在もそうである。

カトリック教が、けっこう真剣な追究の対象になったのは青年期だ。一九六四年、作家・堀田善衛のエッセイで、一五～一六世紀のカトリック僧、ラス・カサスの存在を知った。コロンブスの大航海とアメリカ大陸への到達を契機に始まったスペインの「新大陸征服事業」が、先住民族への虐待・強姦・虐殺・奴隷化に満ちていることを告発した、国王宛ての直訴文を書いた人物だ。当時、この著書の日本語訳はなく、原書を入手して読み、その内容に心底驚いた。同じ時代、キューバから届く新聞・雑誌には、見事なデザインのポスターが入っていて、銃を手にするカトリック僧がよく描かれていた。キリスト者が、本来なら根源的に希求しているはずの社会的正義の実現を等閑にして、民衆に抑圧的な体制に与するばかりのカトリック教会の現状を批判して、反体制ゲリラに身を投じる僧や尼僧が生まれていた。

キリスト教の初源的な意図を実現するためには、マルクス主義の立場に立つ人びととの対話・交流を積極的に求めるカトリックの左派潮流は「解放の神学」派と呼ばれていた。ラス・カサスや彼らの著作を読むことで、イエス・キリスト、十字軍、魔女裁判、宗教改革などのキーワードを通して生半可な知識しか持たない一〇代半ばころの状況に低迷していた私のキリスト教理解は、我ながら少しは深まったと思えた。

今回来日したフランシスコ教皇の立ち居振る舞いと言動に対する私の関心は、この延長上にしかない。通常の国家の形とは違うとはいえ、世界最少のこの国家＝バチカン市国は、世界じゅうに一三億人もの信者を擁していることで、無視できない影響力を世界の政治・社会・思想に及ぼしている。現教皇は、とりわけ、核・環境・気候変動・貧困・移民・死刑制度などの問題に関心が深く、率直な発言を厭わないことで知られる。そこで、日本のリベラル派の中からは、フランシスコ教皇と安倍政権の立場を対立的なものと捉え、前者の率直な物言いが後者を揺るがすような効果を期待する声も、事前には聞かれた。だが、バチカン市国といえども「国家」、その最高責任者に外交「儀礼」や「内政不干渉」原則を超越した役割を期待することは、国際政治のリアリズムに反すると私は考えていた。理想・夢・希望を語かける政治家が世界から消滅したからといって、ひとりの「精神的な権威」がなし得るかもしれない発言に過大な期待を寄せることは、私たちの弱さの反映だ。この場合、期待が寄せられている人物は、一宗派の宣教を最大の課題とする者に他ならない。

今回のフランシスコ教皇の発言の中で私が注目したのは次のくだりだ。「武器の製造、改良、維持、商いに財が費やされ、築かれ」ること自体が「途方もない継続的なテロ行為」だとする長崎での発言である。「核廃絶」に焦点を合わせるメディア報道では、これは重要視されなかった。今回の教皇来日については、メディア挙げての大報道がなされた割には「泰山鳴動して鼠一匹」の感が深い。

教皇来日の意味を考えようとして幾冊もの本を読んでいて、収穫もあった。ジョルジョ・アガンベンの『いと高き貧しさ――修道院規則と生の形式』（みすず書房、二〇一四年）である。一三世紀にアッシジの聖フランチェスコが創設したフランシスコ会の修道院規則と、そこを共同生活の場とする修道士たちの日々の関係を考察対象とした本である。所有権を拒否すること、「いかなる権利ももたない権利」を掲げることの意味、法権利の外部で生きるとは、「国家」という形を取らない政治の可能性――など、「解放の神学」派の宗教者たちが取り組んだ課題が、そこでも切実な形で浮かび上がっていて、示唆的だ。

（12月1日記）

マスコミじゃけの天皇制 41

〈原爆神話〉と〈聖断神話〉
――〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その7

天野恵一

「終わりにしよう天皇制！ 代替わり反対ネットワーク」主催の「ナイトイベント 大嘗祭反対@トーキョー・ステーション」行動がハデにくり広げられた11月14日。私は広島の「大嘗祭に異議あり／改めて象徴天皇制を問う」集会の講師として、広島での抗議集会に参加していた。

私は、そこで、今年の八月に話題となったことをまず話した。

アメリカのワシントン州リッチランドの高校に留学していた高校生が、長崎で使われたプルトニウム爆弾の生産地であるそこの高校のマークに使われている「きのこ雲」に抗議の声を発した。「きのこ雲誇れますか」と。原子爆弾の使用は「正しい」、〈正義の原爆〉というアメリカに生きている政治神話に、公然と疑問の声をあげた日本の女子高校生は、クラスでバッシングされることはなく、その問題提起は受けとめられた。こんな報道だったと思う。

私は、敗戦50年の年、スミソニアン航空宇宙博物館の原爆被害展示が中止においこまれ、原爆を投下したエノラ・ゲイ機などの展示のみに変えられてしまったとき、この〈原爆神話〉が大きく支配しているアメリカ社会の実態について、はじめて気づかされた。原爆は、〝私の命の恩人〟であるという気持ちで生きている人々の存在。「日本で『本土決戦』になったら私の父は死んでいて、私は生まれなかっただろう」という兵士の子供の主張。そういう感情がベースに流れて、この〈正義の原爆〉。原爆（恩人）神話は広く存在しているのだ。もちろん、この政治神話は、国家が作為的につくりだしたものである。実は、もはや日本は「本土決戦」など戦える力はまったくないことは、アメリカのトップはよく知りぬいていた。原爆は、ソ連との対抗上、使用しなければならなかったのだ。トルーマン大統領や、ヘンリー・L・スティムソン陸軍長官が、決戦になったらアメリカ側に「百万人の死傷者が出ただろう」という、まったく根拠のない数字を一人歩きさせた事実に、そのことは、よく示されていた。

このアメリカの〈原爆（恩人）神話〉に対応する、敗戦国日本を支配した政治神話は、〈天皇は命の恩人、「聖断」によって私たちは命拾いした〉という神話である。もちろん、これも日本の支配者によって、作為的につくりだされた、大きな政治神話である。天皇ヒロヒトの敗戦決定への意思は、終戦プロセスには不可欠であった。しかし天皇の決断が、戦争を終わらせてくれたという前に、考えなければいけないことが山ほどあるはずだ。

アメリカの天皇を使った占領政策に助けられて、戦後に天皇とともに延命した日本国家の支配者は、この局面だけ前後を切りはなしてピックアップし、全面的にクローズする方法で、天皇の「聖断」が国民の命を救ったという〈天皇は国民の恩人〉という政治神話を、マスメディアのバックアップの下につくりあげ、大量にふりまき続けているのだ。この政治神話が大衆化されたのは一九六〇年代であり、昭和天皇Xデーの政治プロセスの大キャンペーンの中で、最も強力な天皇ヒロヒト政治神話として、あらためて大量にふりまかれたものである。「日本のいちばん長い日」（「終戦」決定の日）の神話というかたちで。

あの侵略戦争は、絶対神聖な元首である天皇の命令によって開始され、その命令によって収拾されたにすぎない。その命令によって「朕の赤子」が三百万人以上死んだ。その命令によって中国をはじめとする他国への侵略、大量虐殺、略奪がなされ、それらは天皇の名によってすべて正当化され続けたのだ。この〈絶対元首〉に問われなければならないのは、〈戦争責任〉である。そしてその〈責任〉の中には当然〈天皇制の招爆責任〉が含まれる。「国体護持＝天皇制の延命」にのみこだわった天皇ら支配者が、敗戦をズルズル引きのばした結果、広島・長崎への核攻撃が生まれてしまったのだから。いや、原爆だけではない、東京、地方都市大空襲、そして最後の沖縄地上戦も（この時期に日本人死傷者の数は集中している）、天皇らの早い決断があれば回避できたはずである。

最高の責任者が「最大の恩人」へと逆転する、この政治神話の威力は、象徴天皇三代目の「即位・大嘗祭」の今、アメリカの〈原爆神話〉とは反対に、日々、強化されている。アキヒト「平和天皇」という神話の源泉に、このヒロヒト聖断神話があり、新天皇ナルヒトの語る「平和」のベースにも、この政治神話がある。本当は象徴（侵略）天皇に、「平和」を語る資格などはないのだ。

野次馬日誌

11月1日〜11月30日

【11月1日】
明仁、美智子◆ラグビー・ワールドカップ日本大会@東京・味の素スタジアムの3位決定戦を観戦。
秋篠宮、紀子◆「実りのフェスティバル」@東京都豊島区を視察。

【11月2日】
秋篠宮、紀子◆ラグビー・ワールドカップ日本大会のイングランド対南アフリカの決勝@横浜市の日産スタジアムを観戦。

【11月3日】
徳仁◆皇居・宮殿で行われた「文化勲章親授式」で計6人に勲章を手渡す。

【11月5日】
天皇、皇族◆徳仁、雅子が、文化勲章受章者と文化功労者を皇居・宮殿に招き、懇談。秋篠宮、紀子と眞子、佳子が同席。

【11月6日】
徳仁、雅子◆「大嘗祭」の中心儀式「大嘗宮の儀」のリハーサル。
明仁、美智子◆「行幸―近現代の皇室と国民」@国立公文書館を鑑賞。

【11月7日】
徳仁◆「秋の叙勲」大綬章の親授式計10人に勲章を手渡す。
秋篠宮◆秋篠宮が、ラグビー・ワールドカップ日本大会カナダとナミビアの選手らによる台風被災地でのボランティア活動に対し、大会組織委員会を通じて謝意を伝えたと明らかに。
即位パレード◆「祝賀御列の儀」を10日に控え、警視庁が、コース沿道で警備犬を使って不審物を捜索するなど警戒を本格化させた。
オーストリア芸術展◆在オーストリア日本大使館による現地芸術展の公認取り消し問題で、外務省が一部の展示作品について「反日的な内容でふさわしくない」とする電話やメールでの抗議を複数受けていたことが分かる。

【11月8日】
徳仁◆「勅使発遣の儀」に臨む。／訪日しているカタールの王族、シェイク・ハマドを赤坂御所に招き、懇談。
秋篠宮、紀子◆秋篠宮が、東京都港区で、優れた林業関係者を表彰する式典に出席。紀子が、NHK放送センターで開かれた第46回「日本賞」教育コンテンツ国際コンクールの授賞式に出席。

【11月9日】
徳仁、雅子◆「国民祭典」の祝賀式典が皇居前広場で催され、安倍晋三首相が祝辞を述べ、「嵐」が奉祝曲を披露。約3万人が参加した。

【11月10日】
天皇、皇族◆「祝賀御列の儀」が行われ、徳仁、雅子がオープンカーに乗り、沿道の約11万9千人(内閣府)の祝福に応じた。
即位パレード◆「祝賀御列の儀」が行われるのを前に、警視庁が本番と同じコースを使ったリハーサルを実施。

【11月11日】
徳仁◆「大嘗宮の儀」のリハーサルに臨む。午前に皇居・宮殿で新任大使の認証式に臨む。
明仁、美智子◆東京国立博物館で、「正倉院の世界　皇室がまもり伝えた美」を鑑賞。
迎賓館◆迎賓館の庭園（前庭と主庭）を翌年正月三が日に無料で公開する。「祝賀御列の儀」で乗ったオープンカーを本館正面に展示する。

【11月12日】
徳仁、常陸宮◆「大嘗祭前二日御禊」と呼ばれる儀式が、宮中祭祀を担う掌典職を中心に進められる。
大嘗祭◆「庭積机代物」が宮内庁に届く。
「一般公開」◆「大嘗宮」の一般参観を、21日から12月8日までの18日間実施する。

【11月13日】
「大嘗宮」◆宮内庁が、「大嘗宮」を報道陣に公開。

【11月14日】
「大嘗祭」◆「大嘗宮の儀」が、営まれる。／「勅使」が、伊勢神宮の内宮を訪れ、挙行を報告。／皇居に近い東京駅の丸の内側にある広場で、「おわてんねっと」が大嘗祭への抗議集会を開く。

【11月15日】
「大嘗祭」◆「大嘗宮の儀」が14日夜、15日未明、営まれる。

【11月16日】
天皇、皇族◆徳仁、雅子が皇居・宮殿で行われた祝宴「大饗の儀」に参列。徳仁の席の近くに「三種の神器」のうち、剣と璽（勾玉）が安置される。

【11月18日】
徳仁、雅子◆「大饗の儀」の2回目が皇居・宮殿で開かれる。
「大嘗祭」◆「庭積机代物」のうち、29品目について、埼玉県所沢市にある国立障害者リハビリテーションセンターに提供すると発表。

【11月20日】
明仁、美智子◆サントリーホールを訪れ、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の公演を鑑賞。

【11月21日】
徳仁、雅子◆三重県入り。22、23両日に伊勢神宮の「親謁の儀」として、外宮と内宮を参拝、即位の礼と「大嘗祭」が終わったことを報告するためで、「剣璽動座」が実施される。
秋篠宮◆「大日本農会」の総裁として、農事功績者表彰式に出席。
「大嘗宮」◆大嘗宮の一般参観が、皇居・東御苑で始まり、計1万9550人が訪れる。

【11月22日】
徳仁、雅子◆伊勢神宮の外宮を参拝。「親謁の儀」で、「儀装馬車」に乗って神宮内を進み、三種の神器の剣と璽（勾玉）を携える。雅子は馬へのアレルギーのため、馬車に乗らず、車で神宮内を移動。
秋篠宮、紀子◆東京国立博物館を訪れ、「正倉院の世界　皇室がまもり伝えた美」を鑑賞。

【11月23日】

徳仁、雅子◆即位の礼と「大嘗祭」が終わったことを報告するため、伊勢神宮の内宮を参拝。「儀装馬車」に乗って参道を進み、雅子はオープンカーで移動。

【11月25日】

徳仁◆訪日中のローマ教皇（法王）フランシスコを皇居・宮殿に招き、会見。

眞子◆「みどりの『わ』交流のつどい」に出席。

【11月26日】

徳仁、雅子◆奈良県橿原市入り。

【11月27日】

徳仁、雅子◆初代天皇とされる奈良県橿原市の神武天皇の陵を参拝。伊勢神宮参拝に続く即位関連儀式の一環で「親謁の儀」。京都市東山区の泉涌寺を訪問し、明治天皇の父、孝明天皇の陵を参拝し、京都大宮御所に宿泊。

【11月28日】

徳仁、雅子◆京都市伏見区の明治天皇陵を参拝。午後、京都御所で西日本の各界代表者を招いた茶会を開く。

即位パレード◆政府が、徳仁、雅子が即位パレード「祝賀御列の儀」で乗車したオープンカーの一般公開を東京都の迎賓館で始める。翌年1月5日までで、京都市の京都迎賓館でも1月9日から3月17日まで展示すると報道。

【11月29日】

秋篠宮、紀子◆東京・上野の日本学士院会館を訪れ、第35回国際生物学賞の授賞式に出席。

【11月30日】

天皇、皇族◆54歳の誕生日を迎えた秋篠宮が、徳仁、雅子にあいさつするため赤坂御所（東京・元赤坂）を訪問。これに先立ち、明仁、美智子の住まいの皇居・吹上仙洞御所を訪れる。

集会の「真相」

天皇の〈代替わり儀式〉と象徴天皇制を考える・練馬集会

「アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会」は、一七年の一二月に開催した第一回の集会から、この日の集会まで、一一回の集会・公開学習会を重ねてきた。一〇月二九日の今回は、締めくくりとして中島三千男さん（神奈川大学名誉教授、日本近現代思想史）に「天皇の〈代替わり儀式〉と象徴天皇制を考える」としてお話を聞いた。

中島さんは、今回の儀式の決定の過程を詳しく整理し、天皇の代替わりの儀式が「確立」されたものではない、明らかに「創られた伝統」であることを、葬送儀礼や中国的な即位儀礼、大嘗祭の不執行・廃絶や即位灌頂などの具体的指摘とともに説明した。近代日本に至って、明治中期に整備され成立した国家神道の「教義」をイデオロギー的な核心に押し上げると同時に、儀式法制である「登極令」が明治末期に成立、今回の大がかりな代替わり儀式は、捏造された「伝統」を国家の強制により再現させ、新たな「伝統」として塗り固めていく政治過程なのだ。中島さんは、明仁や徳仁の即位儀式についても詳しく分析、前回に比べて批判が封じ込められていることや、世論を「良い天皇」意識に誘導されることにより、これらがなしくずしとなり、今後は、改憲や軍隊との結びつきが進められると思われることを、厳しく指摘した。

参加は五〇名。練馬の会としては、一二月一八日に総括集会を練馬産業プラザで開催して解散、来年の五輪や自衛隊の問題をあらためて活動として提起していく。ご参加を！

（蝙蝠）

ナイトイベント★「大嘗祭反対」@トーキョー・ステーション

一一月一四日、「代替わり」儀式のクライマックスともいうべき宗教儀式が行われた当日夕方、おわてんねっと呼びかけのナイトイベント★「大嘗祭反対@トーキョー・ステーション」に二〇〇人の人々が集まった。「大嘗祭」のメインの儀式は一八時半前後から始まるというので、私たちもその時間に集まった。場所は「大嘗祭」が行われる「大嘗宮」から九〇〇メートルという、東京駅丸の内側から皇居に続く、「御幸通り」の東京駅直近の広い歩道上。歩道とはいえ、二〇〇人くらいはゆうに集まれる広さだ。五〇〇人集まっても大丈夫。さすが「御幸通り」。

時と場所を考えると、本当に行動は開始できるのか、人は集まってくれるのか、場所を確保できるのか、弾圧は大丈夫か、右翼の動向は？……等々、おわてんねっとメンバーは緊張しながら会場となる場所に向かった。しかし、極力トラブルを避けるという警察側の判断なのか、実にたくさんの警察に囲まれてはいたがスムーズに準備は進んだ。そして、開始時間に近づくと参加者は三々五々集まってきた。

一時間ちょっとの行動は、大成功だった。一三人の参加者がマイクを持ち、語り、シュプレヒコールをあげ、歌をうたい、あっという間に時間は過ぎた。夜の行動に会わせてライトを準備し、横断幕や人々を照らし出した。とても美しかった。

私たちも集まった人々も、大きな声は皇居まで届くにちがいないと、「大嘗祭やめろ！」「天皇制はいらない！」の声を上げ続けた。緊張して迎えた当日。でもやってよかった。やれた。勝ち取ったものは大きい。

（大子）

大嘗祭に異議あり！広島集会 改めて「象徴天皇制」を問う

反戦平和系市民運動の裾野の広さと、反天皇制運動のマイナーぶりのギャップが凄まじい広島。それでも「代替わり」の今年は、四月一日に「元号・天皇制・民主主義を考える広島集会」、二九日に田

中利幸さん講演会「天皇制廃止に向けての第一歩：雲上人を人間化する運動を！」をやり、東部の福山では計三回の「天皇制を問う連続学習会」が開かれた。その蓄積の上で大嘗祭当日の一一月一四日は、天野恵一さんをお呼びしての集会となった。

用意した資料が足りなくなったが、六〇部という見積もりは、いくらマイナー路線でも控え目すぎた。初めに広島の市民運動のキーパーソン・足立修一弁護士の挨拶。天野さんはまず、即位式での三名の不当逮捕の件から始めた。手段を選ばない警察の弾圧、批判を絶対に許さない権力の意思、マスコミによる天皇の絶対神聖観の相互連関。ここに天皇制とは何かということが端的に表現されている。天皇制こそが暴力を必然化しているのであって、本島市長狙撃事件を受けた徳仁による「言論の自由の尊重」発言、明仁による日の丸・君が代の「強制は良くない」発言は、メディアを通じた自覚的な騙しでしかない。

戦後がアメリカにおける原爆神話と、天皇による「聖断」神話によって始まったこと、あれだけの死者を出した戦争の責任者がそのまま天皇の地位であり続けるかたちをとった象徴天皇制の原理的な問題を、戦争責任問題とは別に問うことが必要だという指摘。長く反天皇制の側にいたつもりの報告者も、改めて考えなくてはならないと思う論点がたくさんあった。それにしても、新幹線四時間でヘトヘトのまま会場に着いた天野さん、お疲れ様！

（田浪）

女天研大放言大会

一一月三〇日、「天皇が女だったらいいのか」をテーマに、「言いたいこと、言わなくてはならないことを、いまこそ吐き出そう！」という放言しまくりの集会を開催。もしかすると女天研としては初めてのスタイルかもしれない。あらかじめ女天研から首藤九尾子さん、松井きみ子さん、堀江有里さんが放言者として立った。そして女天研外から死さんと空さん。それぞれの視点や経験から語られる天皇観、女性と天皇制の問題は多岐にわたった。

そして休憩をはさみ、会場全体で大放言開始。出るわ出るわ、の大放言大会となった。

多くは身近な天皇体験、直接的・間接的天皇体験が語られるのだが、思いのほか天皇・皇族と遭遇する羽目になったという人は多くて驚く。しかし、遭遇した人の「天皇体験」も、「天皇との関係はこうでなくてはならない」という暗黙のほぼ強制的な規範おしつけの体験であることがわかる。間接的経験と同じなのだ。

全体が起立・拍手といった空気の中で、それに従わない人がまわりから被るなんらかの戒め。あるいは間接的経験といえ

【学習会報告】

河西秀哉『皇居の近現代史』

（吉川弘文館　二〇一五年）

ムツヒトの東京移転により江戸城が「皇居」とされてから、空襲により焼失した宮殿を戦後再建するまでを、皇居を開こうとする力と閉ざそうとする力のせめぎあいとして記述している。二回の宮殿焼失は二回とも天皇による「国民への配慮」を理由に再建が大幅に遅れたこと、皇居の見学者枠は宮殿造営献金者と国家的任務担当者から始まり徐々に拡大していったものの、社会主義の浸透やコレラの流行により縮小、ヨシヒトの死によりほぼ停止したこと、アジア・太平洋戦争期には御府と言う皇居内遊就館のような、機能的には靖国神社と変わらない施設のみが見学を受け入れていたこと、皇居見学を選挙運動に利用した人々がいたこと、敗戦後焼失した宮殿を放置し、新聞に取材させることで天皇制廃止の議論への歯止めを期待したこと、戦後二度にわたって富士山や東京湾へ皇居を移転や開放の議論がなされていたことなどが語られている。

皇居のイデオロギー装置としての分析は少ない。本書は様々な資料に当たり、議論を追いかけ、かつそれらをコンパクトにまとめている。しかしそこまでだ。皇居を舞台にした「事件」としては開こうとする力につながる例として二重橋事件が挙げられているものの、食糧メーデーも血のメーデーも出てこない。天皇制に対して批判的な「事件」として虎の門事件とパチンコ玉事件が挙げられているが、それらはテロとして、天皇と民衆の距離を引き離す、閉ざす力を強めたと論じられる。そも

そも皇居を開こうとすることを「民主化」と呼ぶこと自体が本当は極めてイデオロギッシュな言説のはずだが、著者が自身のそうした政治性に自覚的なのかは意見が分かれた。イデオロギー装置の分析としては全く物足りず、資料を提供しているに留まっている。

年長の学習会参加者は「最近の若い人の本は読む気がしない」とよく言うが、なるほどこういうことかと納得してしまった一冊。著者は歴史学の中堅どころだそうで、大丈夫か歴史学。

＊次回は思索者21の『天皇と神道の政治利用』を来年一月二一日に読む。

（加藤匡通）

る、学校での日の丸君が代強制に従わない人、天皇一族がつくり出す「道徳的規範」や価値観を良しとしない人、天皇一族・天皇制を批判する人が受ける社会的制裁。

前半で発言した死さんの言葉「外れたら制裁」は、すべての発言者の体験に当てはまる。それが威圧的な空気か排他的な言葉か社会的な戒めか、あるいは右翼による暴力か国家レベルの弾圧かだ。しかし、このようにまとめてしまうと会場の空気は伝わらない。世代を超えた放言に笑いと驚きと共鳴があった。（大子）

反天日誌

10月29日（火）●天皇の〈代替わり儀式〉と象徴天皇制を考える・練馬集会（集会報告参照）

11月9日（土）●立川航空祭反対デモ

11月10日（日）●第29回砂川秋まつり

11月11日（月）●政教分離の会集会・天皇代替わりにみる天皇教の残存

11月14日（木）●ナイトイベント　大嘗祭反対@トーキョー・ステーション（集会報告参照）

●大嘗祭に異議あり！広島集会　改めて「象徴天皇制」を問う（集会報告参照）

11月15日（金）●香港に自由を！デモ

11月17日（日）●オリンピックと放射能汚染水・被曝労働を考える

11月20日（水）●『画家たちの戦争責任』北村小夜の出版を祝う会

11月22日（金）●おことわリンク学習会「ボランティアとファシズム」

11月24日（日）●おことわリンクスタンディング

11月25日（月）●緊急アピール行動・香港政府は学生市民の声を聞いて下さい

11月26日（火）●即位大嘗祭違憲訴訟・第二次訴訟差し止め請求分控訴審・第1回口頭弁論

11月27日（水）●東海第二原発の二〇年延長を許さない！　廃炉デー大アクション

11月30日（土）●PP研シンポジウム「私たちは、どのような分岐点に立っているのか　一九六九年から半世紀」

●女天研大放言大会　天皇が女だったらいいのか？（集会報告参照）

集会情報 INFORMATION

開催中●朝鮮人「慰安婦」の声をきく13時～18時（月・火・休日休館）／WAM　女たちの戦争と平和資料館（地下鉄早稲田駅）／主催：同館

12月7日（土）●終わりにしよう天皇制2019
13時30分～／千駄ヶ谷区民会館（JR原宿駅ほか）／主催：終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク（090-3438-0263）

12月8日（日）●「表現の不自由展、その後」中止事件の〈本質〉とは何か
13時30分開場／専修大学神田キャンパス5号館551教室（地下鉄神保町駅ほか）／アライ＝ヒロユキ、岩崎貞明、岡本有佳、番園寛也、安世鴻／主催：表現の不自由展実行委員会（https://FUJIYU.NET/FUJIYU/）

12月10日（火）●胡大平靖国抗議裁判第2回公判
10時～／東京地裁429号法廷（地下鉄霞ヶ関駅）

12月11日（水）●南京大虐殺から82年2019年証言を聞く東京集会
18時開場／全水道会館（JRほか水道橋駅）／葛鳳瑾、孫宅巍／主催：南京集会東京実行委員会（03-3889-9499）

12月14日（土）●「平成」代替わりを問う連続講座　現在の〈日韓関係〉を天皇制帝国の植民地支配責任をふまえて考える
16時30分開場／ピープルズ・プラン研究所（地下鉄江戸川橋駅ほか）／内海愛子、辻子実、天野恵一／主催：同研究所（03-6424-5748）

12月16日（月）●警視庁機動隊の沖縄への派遣は違法住民訴訟・判決言い渡し
14時30分～／東京地裁103号法廷（地下鉄霞ヶ関駅）

●日本の中国侵略と靖国神社
18時30分～／文京区民センター2A（地下鉄春日駅）／纐纈厚／主催：胡大平救援会（03-3591-1301 救援連絡センター）

12月17日（火）●マイナンバー（共通番号）違憲訴訟@神奈川　控訴審決起集会
18時30分～／開港記念会館（みなとみらい線日本大通り駅ほか）／主催：マイナンバー（共通番号）違憲訴訟神奈川原告団・弁護団（080-5052-0270宮崎）

12月19日（木）●治安管理国家化と即位式典反対デモ弾圧
18時～／神田公園区民館洋室B（地下鉄小川町駅ほか）／吉田哲也／主催：中部地区労働者交流会（03-5577-6705）

12月20日（金）●明治公園オリンピック追い出しを許さない国家賠償請求訴訟
11時30分～／東京地裁706号法廷（地下鉄霞ヶ関駅）

12月22日（日）●反弾圧学習会・天皇即位式弾圧から考える
14時～／つくば市春日交流センター大会議室（つくば市春日2―36―1）／主催：茨城不安定労働組合ほか（090-8441-1457加藤）

12月24日（火）●即位大嘗祭違憲訴訟第二次訴訟差し止め請求分控訴審判決言い渡し
15時30分～／東京高裁511号法廷（地下鉄霞ヶ関駅）

1月23日（木）～26日（日）●写真展　となりの宋さん
23日・24日＝13時～20時　25日＝11時～20時　26日＝11時～17時／たましんRISURUホール（JR立川駅）／関連イベントあり／主催：同実行委員会（080-4624-3935谷口）

……神田川

●怒濤の今年も終わりに近づいている。毎年恒例になっていた年末の反天連集会、忘年会も今年はない。天皇誕生日がないのはいいけど、忘年会ができないのはちょっと寂しいね。皆さん、インフル気をつけて！　来年もよろしく！（貂）